みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ピウスツキの業績：ポーランド民族音楽学におけるピウスツキの足跡と意義

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2010-02-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 田村, 進
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003753

ポーランド民族音楽学における
ピウスツキの足跡と意義

田　村　　進*

1. はじめに

ピウスツキ Piłsudski, Bronisław は，アイヌやギリヤークの言語，生活，文化を研究した民族学者であって，民族音楽学者ではない。彼の数多の著作や論文のなかで民族音楽について論じたものは皆無に等しい。ワルシャワ大学音楽学研究所長で民族音楽学者のチェカノフスカ教授 Czekanowska, Anna は「ポーランドの民族音楽学者でピウスツキを研究した者は誰もいない」と言い切っている。これは当然であろう。しかし，私は，ピウスツキが1911年にタトラ協会の民族学部門を設立し，1914年までタトラ山麓の町ザコパネに滞在してポドハレ地方やその周辺地域の民族学的収集に従事していたので，この時期に民族音楽と深く関わっていたのではないか，と推量した。このポドハレ民謡は，ポーランド平野地帯の民謡とは全く異なって，旋律も下降型が多く，多声的に歌われる。舞踊では，グラルスキのように，女性よりも男性が主役になっているが，歌でも男性が高音域で歌い主導的役割を担っている。歌詞も，単語の最初の音節にアクセントを付けて歌われるが，こういうアクセントは古い時代の名残りだという。このように，この地方の民謡は民族学や言語学にとっても研究課題の一つになっているが，これをピウスツキが見逃すはずはなかろう。しかし，彼は民族音楽にどう取組んだのであろうか。私は，これを明らかにするため，1985年10月，短期間ではあったが，ザコパネのタトラ博物館を訪ね，館員のガヴォント女史 Gawąd, Ewa の助言を得ながら，諸資料を検討し1911年から1914年頃までのピウスツキの足跡を辿ってみた。更に，ザコパネのシマノフスキ博物館とワルシャワ大学音楽学研究所でも関連資料に目を通した。

その結果，ピウスツキが，ズボロフスキ Zborowski, Juliusz (1888～1965 年) に大きな影響を与えたこと，そしてズボロフスキの民謡収集と研究成果がポーランド音楽学の泰斗フビヌスキ Chybiński, Adolf (1880～1952 年) と現代ポーランドの偉大

* 東京音楽大学　本館研究協力者

な作曲家シマノフスキ Szymanowski, Karol (1882～1937年) の活動に大きく貢献していることが判明した。特に，ピウスツキが，1914年にポーランドで初めて，フォノグラフ，つまり蠟管録音再生機で民謡を録音し収集するという仕事をズボロフスキと共に成し遂げたことは注目される。これは周知の事実だったが，これまでピウスツキの名はズボロフスキの名の背後に隠れていた。この仕事の先鞭をつけたのは，実は，ピウスツキだったのである。彼がこれから幅広くポドハレ民謡の調査研究を始めようとしていたとき，第一次世界大戦が勃発し，間もなく，彼はオーストリア政府によって国外に追放されてしまう。彼の仕事は挫折した。しかし，彼が播いた種はズボロフスキなどを通して大きく実っている。その意味では，ポーランド民族音楽学のなかでピウスツキが残した足跡はきわめて大きいものがあろう。

以下，この小論では，まず第一に，ズボロフスキの論文「民謡収集の問題について O zagadnieniach zbierania melodii ludowych」[Zborowski 1972: 307–328] のなかで，ピウスツキに触れた部分を引用し紹介して，ザコパネ時代のピウスツキの活動とズボロフスキとの関係の一面を明らかにし，第二に，ズボロフスキとフビヌスキ及びシマノフスキの関係につき簡単に言及したい。

2. ピウスツキとズボロフスキ

ズボロフスキはクラクフの大学で言語学を学んだ後，1913年から20年までノヴィ・タルク Nowy Targ のギムナジウムで教鞭をとり，22年から65年までタトラ博物館の館長をつとめた。彼はいわば民族学者ではあったが，生涯ポドハレ民謡の収集と研究に力を注ぎ，民謡を約百本の蠟管に録音し，数百の旋律を記譜したと言われている。これらの蠟管は散逸し現存していないが，その一部が1920年にフビヌスキによって記譜され，1927年に「ポドハレの山岳地帯の音楽について O muzyce górali podhalańskich」[Chybiński 1961] という論文などに掲載された。

ズボロフスキの論文は，ピウスツキと出会った頃の思い出から書き始められている。

『それはもう昔のことだった。20年前，私はポドハレに行きたかったので，クラクフで定職につくことを諦めた。大学の町から離れたノヴィ・タルクで職に就くのは容易だった。……私は教師の仕事は一時的なものだと考えていた。というのは，方言の研究だけが私の関心事だったからである。ポドハレに来たのも，それが目的だった。しかし，間もなく，私の主要な興味は完全に民族学に移った。その理由は，私が山人達の慣習や日常生活に接していたということよりも，新しい知人に影響を受けたから

であった。彼はザコパネやタトラ山麓一帯の民族学的研究の手はずを整え，ポドハレ地方の新しい魅力を調査し，ノヴィ・タルクやその周辺に足を伸ばしていた。……ある時，私の所に，身なりは質素だが，目が魅力的な年配の紳士が訪ねてきた。表情は爽やかで，声もすがすがしく，気取った所はなく，礼儀も正しい。彼は，ほほえみながら手を差し出し，“知人の知人を通して，いわば人から聞いて，あなたを訪ねてきました。私がブロニスワフ・ピウスツキです”と言った。』[Zborowski 1972: 307–308]

これは1913年のことである。この頃ピウスツキは，「タトラ博物館について W sprawach Muzeum Tatrzańskiego」[Piłsudski 1921: 147–188] で書いているように，博物館建設の構想を練り，その実現に着手していた。そのため彼は，作家や詩人も含めて，タトラ山岳地帯の生活や慣習の研究に関心を持つ人びとを組織していた。ズボロフスキもその一人となった。ピウスツキは自分の構想を語り，彼に協力を求めたが，2人の意見は完全に一致した。この時から，年齢差を越えて，2人の交友関係は深まっていく。

『それ以来，私はビストレの彼の下宿に足繁く通った。彼の部屋にはアイヌやギリヤークの生活に関する手稿や，東アジアの民族学関係の出版物があり，壁にはアイヌの祭司の衣裳を着たピウスツキの絵が掛けられていた。彼は，時には顔を曇らせながら，流刑されて滞在したときの“アイヌ王”のことや，自分の研究のことについて語った。……ある時，彼は，内部に綿を敷きつめた木製の小さな箱を取出し，アイヌの歌を録音した多くの蠟管を私に見せてくれた。残念ながら，彼は録音再生機を持っていなかった。ただ，彼が自分のポケット・マネーで買った多量の蠟管だけが彼の所有物だった。私は，これは僅かな出費で済むような日用品だと思った。彼は，蠟管の作成に使う素材が長持ちしないので，録音収集にはお金がかかる，とこぼしていた。振動板下の針でつけたデリケートな音溝を定着させるためには，電気録音によるディスクの作成が必須の条件である。ウィーンやアメリカなど，外国では，民謡や各地の方言をこういうディスクで収録したものが作られている。』[Zborowski 1972: 309–310]

彼らは，録音収集の仕事を成功させるためにはディスクが必要であることを理解したが，これを個人で買うお金はなかった。しかし，ウィーンアカデミーではこの機器を備えているだろうから，容易に借用しあるいは入手できるだろうと，軽く考えていた。早速，彼らはウィーンのフォノグラフ・アルヒーフ，クラクフの録音再生機店，そしてその頃ウィーンに滞在していた音楽学者のフビヌスキ教授にも手紙を書いて，

ディスク用機器の型式と定価を問合わせたところ，費用が2千クローネにもなることを知った。個人では負担できない金額であった。

『ブロニスワフ・ピウスツキはその頃クラクフに長く滞在していた。彼はそこで科学アカデミー・人類学委員会の民族学部門の書記として働いていた。彼は外国の民謡収集家達の手紙，定価表，内容見本，機器の説明書，ディスク製作所案内を取揃えたのち，当時の科学アカデミー書記局長に会見したいと申入れた。その希望は叶えられなかった。心を痛めたピウスツキは，原則上拒否，と記された書記局長のメモ用紙を私に見せてくれた。大変良くない！』[ZBOROWSKI　1972: 311]

ディスク用の機器を，科学アカデミーでは購入してくれないので，2人は途方に暮れ，やむを得ずフォノグラフの借用に奔走する。しかし，その頃はクラクフでも最新式のグラモフォン，つまり蓄音機とディスク（円盤式レコード）が普及し始めていたので，時代遅れの旧式なフォノグラフの借用又は入手は困難だった。そこでピウスツキは，ウラジオストックに住む友人の民族学者にフォノグラフ借用を申し込んだり，その他あらゆる手立てを尽くすが，結局ズボロフスキがフォノグラフ一式を分割払いでスイスから購入することになった。スイスから荷物が届いたのは1914年の4月中旬であった。

『私はすぐブロニスワフ氏に荷物が着いたことを知らせたが，折返し彼から“あなたと同じように私も大変嬉しい”という返事が来た。早速，山岳地帯の旋律の録音収集が始まった。蠟管はすぐ使い果してしまう。ポドハレ民謡の名奏者バルトゥシ・オブロフタ Bartuś Obrochta の演奏もほんの一瞬だけしか収録できない。』[ZBOROWSKI　1972: 313]

ポーランドで最初の録音収集は，このように，ピウスツキとズボロフスキの努力の結果実現した。バルトゥシはオブロフタ楽団――ヴァイオリン3人，バス1人――のリーダーであった。彼らは独学のアマチュア演奏家だが，その即興的演奏と音感覚は抜群で，後年シマノフスキもこれを聴いて驚嘆しポドハレ民謡への関心を高めたのである。

『しかし，問題はまだ半分しか解決していなかった。フォノグラフによる採譜の開始は共通の喜びではあったが，ブロニスワフ・ピウスツキはアイヌの歌を録音した蠟管の耐久性に不安を抱き悩んでいた。電気録音によるディスク作成という方法で，これらを複製しておかなければ，これまでの仕事はすべて水泡に帰してしまうだろう。また，軟らかい材料で作られた蠟管に録音されたものを再生する場合でも，録音時に針で刻まれたデリケートな音溝が，天候の状況に影響されて，すりつぶされ，傷つき，

破壊されてしまうかもしれない。私達はどうすることも出来なかった。』[ZBOROWSKI 1972: 313]

しかし，ピウスツキとズボロフスキは思案の末，あるウィーンの学者の申出を受入れようと決心した。それは，オリジナルの蠟管を譲ってくれるなら，金属板の複製を無料で作成するという申出だった。しかし，第一次世界大戦が始まっていたため，これは立消えになってしまった。

『ピウスツキはすぐスイスへ行った。彼は，アイヌの蠟管の成行きを心配して，そこから数回私に手紙を書き送ってきた。私の山岳地帯の蠟管は出来るだけ密封して保存した。』[ZBOROWSKI 1972: 314]

その後ズボロフスキはピウスツキと再び会うことはなかった。

3. ズボロフスキとフビヌスキ及びシマノフスキとの関係

フビヌスキは音楽学者で，戦前はルヴフ大学の教授をつとめ，戦後はポズナニ大学音楽学研究所長となった。専攻はポーランド音楽史だが，研究分野の幅も広く，著書・論文・評論の数は総計650点，民族音楽関係では45点にも及んでいる。その殆どがポドハレ地方の民謡に関するものである。ポーランドの音楽学者で，直接にせよ間接にせよ，彼の教えを受けなかった者はいない。

彼は，第一次世界大戦頃から，ポドハレ民謡の研究のため，毎年夏をザコパネで過ごすようになった。前述したように，ピウスツキとズボロフスキが，ディスク用機器について，彼に問合わせの手紙を書いているところを見ると，彼らの関係は当初から親密だったようだ。その度合いは，第一次世界大戦後，更に深まっていく。この頃のことをズボロフスキは次のように書いている。

『世の中が平和になった時，再び私の“蠟管”の成行きが心配になった。私は，今回はポーランド政府当局の援助を受けられるだろうと確信していた。しかし，もう一度この蠟管を全部複製するだけの価値があるのか？　あるいは，すべて新しく録音し直す必要があるのか？　ちょうどその頃，フビヌスキ教授が，タトラ博物館宛の手紙で，山岳地帯の音楽と楽器の研究に取りかかったと伝え，博物館の収集物のなかに旋律の手稿がないかと問い合わせてきた。そういうものは無いが，ただフォノグラフで録音した蠟管はあると返事を書き，更にこれらの蠟管の成行きは保証できないので，これを使うなら出来るだけ早いほうが良いと伝えた。』[ZBOROWSKI 1972: 314]

フビヌスキによってこの蠟管の旋律が全部，楽譜として，書き取られたという。そ

れは1920年のことであった。その過程で音溝は傷つき破壊されて蠟管はスクラップと化してしまった。その他の蠟管，例えばオブロフタの演奏や古い時代の歌を録音したものは貸出されたため散逸してしまった，という。ともあれ，フビヌスキが収集し記譜したポドハレ民謡は約300曲で，そのなかにはピウスツキとズボロフスキが収録したものも含まれている。フビヌスキのポドハレ民謡の研究は，ポーランド民族音楽学史上，非常に重要な位置を占めているが，タトラ博物館長としてこれに大きく貢献したのがズボロフスキであった。

シマノフスキがポドハレ民謡に注目しザコパネに定住したのは1922年8月からであった。この民謡の独創性に，シマノフスキの目を向けさせたのは，フビヌスキとズボロフスキであった。この頃のことをフビヌスキは次のように書いている。

『1922年以来，シマノフスキは“ザコパネ無しでは生きられぬ”グループの一員になった。……タトラ博物館はユリウシ・ズボロフスキの献身的で賢明な配慮によってりっぱに充実し発展した。彼は山岳地帯の音楽や方言をポーランドで初めてフォノグラフに録音収集した人であり，この地域の研究・開発に身を捧げている。……彼はやがてシマノフスキときわめて親しい友人となった。バレエ“ハルナシェ Harnasie”の台本作者もこの頃タトラ博物館に足繁く通っていた。“山人たちの財産管理人”のズボロフスキは，何百という数にわたって収集した山岳地帯の民謡をシマノフスキに，時どき歌って聴かせていた。』[Chybiński 1980: 15–17]

シマノフスキはこのようにズボロフスキから多くのものを学びとっている。彼は，1924年の論文「山岳地帯の音楽について O muzyce góralskiej」のなかで，ズボロフスキに触れ，『彼はポドハレ民謡の歌詞については生きた百科辞典である。ポドハレの殆どすべての歌詞を系統的にノートに書き記し，それらを博物館の彼の部屋の書棚にきちんとしまっている。』[Szymanowski 1984: 105] と書いている。

シマノフスキの後期の傑作，例えば，ピアノ曲「20のマズルカ」作品50，バレエ「ハルナシェ」作品55，「第四交響曲」作品60などは，ポドハレ民謡に根ざした作品だが，こういう彼の創作にズボロフスキが大きく貢献したことは明らかであろう。シマノフスキはスイスやパリからもズボロフスキに宛てて手紙を書いているが，その文面には相互の信頼と友情が感じられる。病状悪化のため寒いザコパネに住むことを医師から禁じられたシマノフスキは，1936年8月24日，ズボロフスキ宛の最後の手紙で，ザコパネの別荘を引払い一切の家財道具や書類の管理を彼に依頼し，『今すぐザコパネに戻れたらどんなにいいだろう！　現在の生活はすべて何も楽しいことはない！そんなことを考えるな，とでも言うのか，ユーレック？……』[Bronowicz-Chy-

LIŃSKA 1958: 467] と結んでいる。ズボロフスキの努力によって，シマノフスキの遺品や手稿が保存され，現在のシマノフスキ博物館設立が可能になったと言ってもよかろう。

4. 結びに代えて

ピウスツキがザコパネとクラクフで活動した期間は，僅か3年余ではあったが，その業績はきわめて大きかった。特に彼が各分野の専門家を共同研究者として組織したことは注目される。ズボロフスキもその一人だったが，ガヴォント女史は筆者に宛てた手紙で『ピウスツキの共同研究グループのなかで，ポドハレの民族文化遺産の収集に携わった者にはギジツカ Giżycka, B.，ステツキ Stecki, K.，ウィシツキ Łisicki, B.，など多数にのぼった。タトラ博物館の収集物で，絵，民具，民謡の歌詞と旋律のような典型的な民族芸術品が多いのは，このためである。ピウスツキのお蔭で博物館の基礎と各部門の課題が設定された。彼の死後長い年月をかけてそれを実らせたのがズボロフスキであった。ピウスツキは山岳地帯の民族学的研究誌“ポドハレ年報”の出版を計画し，その実現に努力したが，これは今日まで続刊されている』と書き送ってきた。

ピウスツキが，直接的にも，そしてズボロフスキを通して間接的にも，ポーランド民族音楽学に残した足跡には無視できぬものがある。また作曲界への寄与も注目される。

文　　献

BRONOWICZ-CHYLIŃSKA, Teresa (ed.)
1958 *Karol Szymanowski z listów*. Polskie Wydawnictwo Muzyczne.
CHYBIŃSKI, Adolf
1961 O muzyce górali podhalańskich. In L. Bielawski (ed.), *O polskiej muzyce ludowej*, Polskie Wydawnictwo Muzyczne.
1980 *Szymanowski a Podhale*. Polskie Wydawnictwo Muzyczne.
PIŁSUDSKI, Bronisław
1921 W sprawach Muzeum Tatrzańskiego. *Rocznik Podhalański*. nr. 1 pp. 147–188. Kraków-Zakopane.
SZYMANOWSKI, Karol
1984 O muzyce góralskiej. In K. Michałowski (ed.), *Karol Szymanowski Pisma, Tom* 1 *Pisma Muzyczne*, Polskie Wydawnictwo Muzyczne, pp. 103–108.
ZBOROWSKI, Juliusz
1972 O zagadnieniach zbierania melodii ludowych. In J. Berghauzen (ed.), *Pisma Podhalańskie Tom* 1, Wydawnictwo Literackie Kraków, pp. 307–328.